

居眠りにならなくて本格的に寝てしまう。2時間寝てしまって、起きて、「さあ仕事だ」と言って、また眠たくなってしまふ、こういうストーリーだと思うのですが、その辺とも絡んでいる話で、また後で議論をさせていただければと思っています。

それでは、全国で水泳教室の先生をなさったり、スポーツコメンテーターとして御活躍の田中さんからお話をちょうだいしたいと思います。よろしくお願ひします。



田中 よろしくお願ひします。皆さんお願ひします。

私は、北海道出身でして、今回、この交通事故減少を目指してというフォーラムに参加させていただいて、大変うれしく思っています。

スポーツと交通事故とのかかわりというのはどういうことなのかと皆さんも御興味あるとは思いますが、私自身も、このお話をいただいてから、交通事故について改めて考えるきっかけをいただきました。

私自身は、車も勿論今、運転していますし、ただ、免許を取ったのは18歳のときでして、15歳まで北海道にいたのですけれども、高校入学と同時に東京に行きまして、そこで免許を取ったものですから、実は北海道の冬の運転というのは、1度か2度し

かしたことはないのです。なので、どれだけ危険かというのは、今日、逆に言う、本当に皆様のお話を聴いていて教えられていて、改めて冬の道の怖さというのをすごく感じています。

その1度、2度の運転の中で、北海道ではないのですけれども、アメリカのバージニア州というところに留学をしているときに、1度危険な目に遭ったことがあります。というのも、そんなに積雪のある地域ではないのですけれども、すごく寒いところで、1日ですごく大量に雪が降って、普通の小さな、高い車ではなかったのが怖かったのですが、運転して、広い駐車場の中で運転しているときに、やはりスリップしてしまひまして、クルクル車が回ってしまひました。でも、やはりとっさにブレーキを踏んでしまひて、一度だけ怖い思いをしたことがあります。

また、父親が岩見沢から、実は職場が小樽の方でして、ずっと通っています。1時間半、冬なんかは2時間近くかかりますね。そういったときの冬道の話は何度か、危険な目に遭ったことがあるというのを聴いていて、例えば、両サイドに雪山が高いところでスリップして、そのまま上ってしまひて、車が横転ではなくて回転するぐらいにすごい事故が起きたりとか。まあ、命が無事なのでこうやって話させてもらっているのですけれども。それとか、前も後ろも見えなくなってしまひて、エンジンもストップしてしまひて、そこに5時間ぐらい閉じ込められたこともあるという話を聴くと、どれだけ大変な、雪道というのはやはり気をつけなければいけないことなのかなというのを実感しています。

また、先ほど眠気という話を聴いていて思ったのが、溝端先生も今おっしゃったように、昼寝をされている方もいらっしゃるというのですけれども、水泳選手というのは朝練と午後練がありまして、昼は必ず昼寝をします。大会でも、予選と決勝の間に昼寝をするんですね。というのを言い訳にして、特に昼間眠くなります。引退してからもその特徴が抜けないのか、昼はどうしても眠くなるんですね。運転していても、やはり眠くなって、今、テストを受けていたのですけれども、13点というのは高いですか。

萩原 ちょっと高いですね。

田中 高いということで、本当に気をつけなければいけないなと思っているのですけれども、現役時代も、そうやって朝早くに起きて練習をして、昼寝をせずにまた午後の練習に行くときなんかは、練習場所が遠いときには時々車を使って行くのですが、本当に眠くなるんですね。先ほどテストの中でも、渋滞で2～3分止まっても、目を閉じたら、寝ていたのではないかなという危険なときがあると、私は何度か経験したことがあるのですけれども、そういうときは、大体疲労と睡眠不足が重なっているときかなと思います。

今となつては、お酒を飲んで運転しないというのは、本当に皆さん、心にとめていらっしゃる方がたくさんいらっしゃると思いますし、私も、それはもう絶対だというのがわかっているのですけれども、逆に言うと、疲れているときとか寝不足のときって、無理して運転してしまうことは、まだ皆さんあると思うし、私自身もどうしてもあるんですね。そういったことの方が、今

となつては、お酒というのは普通に当たり前に危険だということを認識しているのですが、そういう自分の体調の意識というのは、まだまだ皆さんの中で根づいていない、私の中でもちょっと気をつけなければいけない点かなと思った次第です。

今までお話を聴かせていただいていると、実質、物質的な原因というものがたくさんあると思います。勿論、道路、路面の状態ですとか、睡眠不足ですとか、体調ですとかというものもあると思うのですけれども、その中に、やはり不注意だったりとか、自分の運転に対しての過信というものが含まれるのかなと思います。私は自分で、実は運転がうまいと思っています。自分で言うのも何ですけれども。そう思っていることが、多分、一番危険なんだなということを感じることも多々あって、やはりそういった過信だったりとか不注意というもの、日々、毎日車に乗っている人こそ、そういったことに気をつけなければいけないのではないかと改めて思いました。

ちょっと話が飛んでしまうのですけれども、不注意だったり過信というところの裏づけとして、私はスポーツを20年近くしてきました、いろいろなことを学んだ中に、人とのつながりだったりとか、人への感謝とか、自分が人から支えられているということを実感することが本当にたくさんありました。

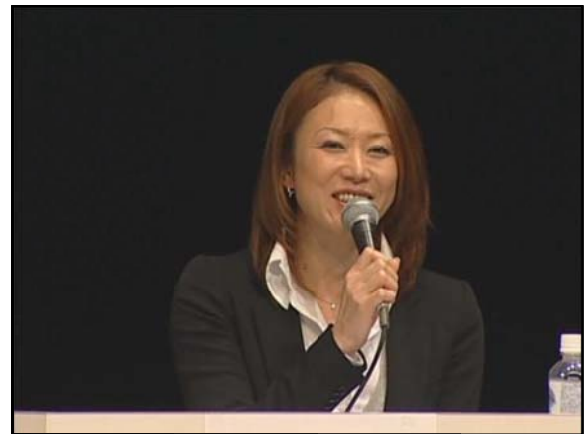
特に大きいきっかけとなつたのは、シドニーオリンピック、今からもう10年も前になりますけれども、メドレーリレーで銅メダルを取ることができたのですが、そのときというのは、私は自分の個人としてのメダルも目指していて、結局、予選会でピー

クを迎えてしまって、そこからどんどん調子が悪くなって、不安の中で迎えたのが本番でした。実際に結果としては100メートルで6位と200メートルで7位という結果になってしまって、泳ぐのも怖くなって、最後に残っていたリレーに出たくないはずと思っていました。

けれども、4人でリレーは泳ぐのですが、3人のメンバーが本当に、1人で取れなくても4人で泳いだら絶対にメダルを取れるんだという言葉をいただいて、その言葉で思い切り自分にチャレンジすることができて、泳ぐことができて、0.3秒差でドイツに勝ってメダルを取ったときに、メダルを首にかけてもらったときに、すごく重たくて。そういった重さというのは、本当に1人じゃなくて、周りの人、コーチもそうですし、仲間は勿論です、プラス親だったりとか、そういったこと、かかわっている人すべての人に生かされているなというのをすごく感じました。その分、自分も周りの人にそういった感謝の気持ちを伝えなければいけないなったり、そうすることが周りの人にとってのためになったりとかするんだなということを感じています。

ちょっと交通事故から離れていますけれども、どういうことかという、そうやって人を大事に思うことが、自分を大切にすることにもつながっていて、事故とかそういった不注意とかというのは、結局自分のためでもあったりするのですけれども、そういった周りの人のためでもあるという。無理やりにつなげたわけではなくて、そういうことをすごく実感することが多いです。命の大切さというものが、自分のものだったら、本当に勝手にあきらめられたりとか、

いつでも、特に私は、水泳をやっているときなんかは、いつ水泳をやめてもいいなと思っていたり、変な話、いつ死んでもいいなと思っていることが多かったんです。ただ、周りに余りにも自分のことを支えてくれる人がいるために、頑張りたいだったりとか、その人たちと一緒に楽しいことをもっとしたいとか、何かそういうことって、大したことないようですごく大きいことなのではないかと思ひまして、この場で話す一つのテーマとさせていただけたらなと思ひました。



私は今、東京に16年住んでいますけれども、大概、北海道出身と言うと、交通安全のことに言えば、「事故が一番多いんだよね」と言われます。言われるたびに、ああ、そうみたいなんだけど、あの広い長い道を走ると、そうになってしまうのかなと思ひましたが、さっき平澤先生の話をお聴していると、愛知が一番だったということで、愛知出身の方がいたらすみません。でも、やはり一人一人の1番になってはいけないという気持ちがそういう結果になっていたと思ひますし、決してそれで甘んじてはいけない。ワースト1位を抜けたといっても、まだ恐らく2位のあたりなんですか、2位ですね。もっともっと、ベスト1位になる

ように北海道の方たちに気をつけていただいて、私も何かできることがあったら協力していきたいなと思います。

北海道に帰ってくるときには、大矢さんがおっしゃっていたように、講習を受けさせていただいて、冬道も気をつけたいなと思います。今日は一緒に勉強していきたいなと思っています。

私からは以上になります。ありがとうございます。

溝端 ありがとうございます。大変すてきな話を伺ったように思うんです。とりわけ私の今、記憶というか、それに残ったのは、人から支えられて頑張れたというお話がございました。北海道は、別室で、控室の方でちょっと話しているときに、今560万人だけでも、道人口ですね、それが20年ぐらいすると400万人ちょっとかな、それぐらいになると。日本全国で言えば3,000万とか4,000万とかこれから減るんですよ。20年あるいは40年かけて三千何百万人という数字が出ていましたけれども、とにかく減っていくと。

一方で、今年の猛暑の時期でしたけれども、マスコミが行方不明100歳以上高齢者という事で大騒ぎになりましたよね。それって、そこまで人間が生きてしまうと、みんな「お一人様」になるんですよ。カップルであっても、男性の方があの世に先に行きます。ですので、女性が残されてお一人様になるわけですね。そのときに、やはり人から支えられている、地域でどうやって支えてあげるかという話は、物すごく大事なことになるので、支えてもらおうと頑張れるってありますよね。それは高齢者でも全く同じで、私は、とりわけ北海道は大変な

ところがいっぱいあると思うんですね。札幌の周辺は大変よろしいところだと思うのですが、ちょっと地方というか郡部と申し上げたらいいでしょうか、そういうところに入っていくと、その問題が如実に出てくる。

最初に、お生まれになったのは遠軽町というお話をいただきましたけど、人口規模はどれぐらいでしょうか。

田中 えっ、どれぐらいなんですか。

溝端 わかりませんか。

田中 聞いておきます。

溝端 いいえ。多分大変なことになっているだろうと思うんですね。

田中 そうですね。先日も、実は遠軽町で水泳のレッスンがあって行ってきたんですけど、やはり、だんだんと人口減少して、子どもたちも減っていますね。

溝端 そうですね。ありがとうございます。非常に大切なキーポイントになるようなお話をいただいたように思います。ありがとうございます。お時間も守っていただきまして恐縮です。

それでは、4人目の先生ですね。さっき高級車の話がありましたけれども、自動車技術ってこんなに進んでいるんだよ、こんなに安全運転に、特に冬の安全運転ですね、滑らない運転ができているんだよという話と、余り車を信用しなさんという話と、多分両方出てくると思うんですが、よろしくお願いします。藤川さんです。

藤川 藤川です。ちょっと田中さんのいい話を聴いて、うるうると来てしまったので、きちんとしゃべれるかどうか自信がないですが。

実は、つくばの田舎から参りまして、こ